19　モアビットなる市病院

泉　彪之助

演者は先に、衛生学者坪井次郎がローベルト・コッホから講習を受けたベルリンのモアビット病院は、森鷗外の『独逸日記』にある「モアビットなる市病院」と同じであろうとした。一八八七年(明治二十年)、鷗外はベルリンを訪れた石黒忠悳を視察に案内したが、モアビット病院はその一つである。小堀桂一郎氏は著書『若き日の森鷗外』の中で、鷗外自身が使用した案内書によってこの病院の要点を記載しているが、詳細な説明は省略されている。

演者は、関係者の好意でこのモアビット病院の概要を明らかにしたので報告する。

ベルリンの最初の公的医療機関シャリテは、一七一〇年にペスト施設として創設され、一八一〇年ベルリン大学が開学すると付属病院となった。ベルリン市は医療施設を持っていなかったが、人口の増加に伴い、市自身も医療施設をもつことが必要になり、一八七四年フリードリッヒスハイン（ベルリン市東部）に市立病院が設立された。

これより先、一八七〇年、七一年に天然痘が流行し、ベルリン市は患者を収容するため、四か所の仮病舎を設置した。その一つは、普仏戦争戦傷者のためテンペルホーフに建てられていた戦時病院を転用したものだったが、軍が明け渡しを要求し、代わりにモアビット地区(ベルリン西部、ティーアガルテンの北)のトゥルムシュトラーセにある市有地に病舎を建てることとなった。一八七二年の一月から四月にかけて建築が行われ、十六棟の仮設病棟と付属施設が作られた。これがモアビット病院の起こりである。

前述のように一八七四年にフリードリッヒスハインの市立病院が開かれたが、ベルリン市西部にも病院が必要とされ、一八七五年、臨時の施設であったモアビット病院が正式に市立病院となった。鷗外らが訪れた時の病院

の名称と住所はStädtisches Krankenhaus Moabit, N. W., Thurmstr. 21で、病床数八五〇であった。モアビット病院に続き、一八九〇年にウルバンにも市立病院が作られた。これら市立病院の設立に尽力したのが、ベルリン市議会議員であったルドルフ・ウイルヒョウである。

モアビット病院が市立病院となって初代の院長がハインリヒ・クルシュマン（クルシュマン螺旋の記載者）、その後を継いだのが『独逸日記』に出てくるパウル・グットマンで、モアビット病院勤務前はベルリンで開業すると共にベルリン大学の私講師をつとめていた。モアビット病院では内科主任も兼ね、数冊の著書がある。

一九二〇年から、モアビット病院はベルリン大学医学部の教育の一端をになうこととなった。ナチス支配下、第二次大戦の戦火、戦後の国際政治上の苦難を越えて、モアビット病院は現在も、ベルリン市民のための医療機関として活躍している。

現在の病院の名称はKrankenhaus Moabitで、経営主体はGesellschaft bürgerlichen Rechtsとなっている。病院の住所は今もトゥルムシュトラーセだが、正面玄関はビルケンシュトラーセ側にある。演者が撮影した古い建物は旧看護婦宿舎で、現在は管理棟として使われているという。

（福井県立大学看護短期大学部）